

帰還兵言説のなかの火野葦平「美しき地図」

松本和也

I

「わが戦記三部作」をはじめとした戦争文学によって知られる火野葦平の相貌は、渡辺考『戦場で書く 火野葦平のふたつの戦場』（朝日新聞出版、令2）にもよく書かれているが、同書は火野の従軍体験に即して中国戦線とフィリピン戦線に注目している。逆に、その狭間に位置する帰還兵としての火野については、論及が皆無でエアポケットとなっている。翻って、先行研究を参照すれば、帰還兵としての火野に特に注目した論文が二本ある。

第一に、火野を論じる池田浩士は、中国戦線からの帰還兵に向けた二冊のパンフレットに注目している。池田は、火野葦平・陸軍美術協会編『戦友に慟ふ 附戦場より／帰還兵士の言葉』（軍事思想普及会、昭14）からは『無惨に破壊された人間としての兵士たちを直視し、かれらが戦地から帰ったときに銃後の社会そのものを——制圧した異境でそうしたように——破壊するであろうことを、切実に予感している』ことを、陸軍省情報部『輝く帰還

兵のために（改訂版）』（陸軍省情報部、昭14）からは『戦地からの帰還兵が銃後にもたらすものについての軍首脳部の懸念』として、『戦地の現実が銃後にそのまま伝わることへの憂慮』と『無分別なことをする様な者』への危惧』を読みとっている。

第二に神子島健は、三〇万人に及ぶ『帰還者の増加』に注目して、『直接彼ら（帰還兵）の話聞く機会が生まれ、マスメディアが戦場を伝えるのとは別の形で戦地と銃後をつなげる回路が出てきた』ことを指摘する。その上で神子島も、『戦友に慟ふ』、『輝く帰還兵のために』を検討し、火野の企図よりは、『戦地と銃後を結ぶ生きたメディアとしての帰還者は、軍から見て銃後でのリーダーシップに対する期待と、戦場の負の実情を知らせかねない不安という二面性を孕んでいた』という軍部の考えを抽出している。ただし、それらの解決・馴致のための言説は、当事者である帰還兵・火野によって生産され、その結果、『英雄としての帰還兵、帰還作家のメディアへのプレゼンスの一つのピークを火野が作った』と評されるような言説状況が形成されていった。

このように、帰還兵としての火野に注目した右の二論文ではあ

るが、その本業である創作については、神子島が《火野葦平は「雨後」で帰還兵というアイデンティティを拠る所になっている人物を造形した》⁶という着眼から「雨後」(『中央公論』昭15・7)に論及したのみで、真正面から帰還兵をモチーフとした新聞連載小説「美しき地図」には、なぜか両者とも言及していない。

そこで本稿では、火野帰還後の帰還兵をめぐる言説を参照した上で、「美しき地図」の歴史的意義を検討していきたい。

II

《火野葦平さんの凱旋くらゐ華やかなものはなかつた》(日比野士朗「火野葦平と上田廣」、『文芸』昭15・1、80頁)と賛嘆された火野の帰還は、「火野葦平軍曹帰還」(『東京朝日新聞』昭14・11・6)などで報じられたほか、火野自身も「帰還兵士の言葉(上・中・下)」(『東京朝日新聞』昭14・11・7・9)を書くなどして、昭和一四年末以降、帰還兵言説は隆盛をみていく。

そうした中、火野は「戦友に想ふ」(『戦友に想ふ』前掲)において、「最も心にかかる」こととして《我々兵隊が戦場を去つて、再び故国の土を踏み、軍服を脱ぎ、銃を置いて、社会人にかへることに》(4頁)の不安を吐露し、《極端にいへば、我々兵隊は言語に絶する衝動をうけて、神経に異常を来し、頭の調子が狂つてしまつてゐると称しても差し支へない》(11頁)という状態への理解を求めた上で、帰還兵には乱暴を戒め、さらに《戦友諸君よ、我々はいつまでも立派な兵隊であつたことに誇りを持ち、戦場で結ばれた親愛の情をもつて、日本を生かし、いつまでも人

から指をさされない立派な兵隊として生きようではないか》(39頁)と呼びかけている。さらに、銃後について火野は、《非常に心強く何んの心配もない》、《しかしその故にその安易に狎れて少しく戦争の大きさを忘却し、兵隊についても幾らか関心を抜いてゐるのではないか》(66頁)と疑問を呈してもいた。

火野同様、帰還作家の上田廣も「戦地より帰りて(上)」(『東京朝日新聞』昭14・11・26)を書き、《二年振りに国鉄の上官や多くの同僚や文学上の先輩や家族に会へて嬉しかつたけれど、それで直に胸の底にある蟬りのやうなものが取り去られたとは思へない》と述べ、《その胸の蟬り》は《恐らく帰還した兵隊全部が持つてゐる》(7面)ものだという。つづく「戦地より帰りて(下)」(『東京朝日新聞』昭14・11・27)で上田は、《銃前と銃後と、その戦ふ姿勢の異なるのを思ふと、帰つて来たばかりの者には若干の不安が感じられないでもない》(5面)と述べていた。

火野、上田の帰還については、林房雄が「戦争と人間の成長——文芸時評——」(『文学界』昭15・1)で《二人の兵隊作家が帰つて来た》、《無事に帰れたことが何よりも嬉しい》(170頁)と言祝ぎ、《二人の兵隊作家は自己を変化させることによつて、新しい作品を作り、その作品によつて日本の官吏軍人及び国民一般の文学認識を変化させた》(173頁)とその貢献を評価していた。

こうした時機に、「帰還兵の感想」募集「(『文芸春秋』昭14・11)が企画される。《帰還兵諸君！ 貴下のありの儘の感想を是非送られよ！》とはじまる告知文は、次のようにつづく。

慰問袋の手紙に、送られた新聞に、遙か郷里の様相を種々と心配された貴下が、久振りに祖国の土を踏んで感じた事は何

であつたか。幾度か死線を越えて鍛えられた貴下の純一無雑な眼に先づ映じた銃後の生活は如何であらう。又、貴下の現在の生活心境は、再び見る職場の生活は如何であらう。更に傷病の身となつて帰られた人の生活は保障されてゐるであらうか。(略)我々は全幅の期待と信頼を以て帰還兵諸君の衷心の叫びを待つ。(296頁)

特集「帰還兵の感想」(『文芸春秋』昭15・1)には、選ばれた三編(和田誠「生活の触角」、朝原吾郎「政治家よ死に身になれ」、高見澤由良「二巡査との交渉」)のほか、「帰還兵感想抄」、編輯部「選後に」も併載された。「選後に」によれば、『応募原稿百三篇、総て帰還兵諸氏の熱意と純潔な觀察の結晶であつた』、『この計画が、十一月号誌上に発表されるや、たちまち各方面から注目の的となつた』(340頁)という。林房雄も「帰還作家の問題——文芸時評——」(『文芸春秋』昭15・3)で、『戦場に於て体感し悟達した精神と眼光によつて、銃後日本の姿を見なほし、我らのまことに行く道を示してくれ、といふ期待が国民の間にみなぎり渡つてゐるのが日本の現状』だといふ觀察に即して、『本誌新年号で「帰還兵の感想」が絶大の好評を博したのは、この尤もな国民感情の現れの一つ』(339頁)だと捉えた上で、『為政者も国民も日本の伝統の強靱さ、日本人の精神の健康さを信じて、今後新しく生れる帰還兵の思想と文学に対すべき』(343頁)だと述べ、特集「帰還兵の感想」の意義を指摘しつつ、帰還兵への期待を表明していた。

以下、「美しき地図」連載前後の帰還兵言説を素描しておく。

火野葦平「帰還兵士の言葉」(前掲)については、上司小剣が

「帰還兵への期待(社会時評)」(『文芸春秋』昭14・4)で、『芸術的なよい頭をもつた火野氏が、最近某新聞に寄せた感想的通信において、重大なる社会問題の爆弾を投げた』と捉え、その概要を『戦地の生活と内地の生活との調和に就いて、いろいろ説いてゐる』(116頁)と要約した上で、次のように応答していた。

私は、火野氏がその戦友にうつつたへてゐる杞憂を一般国民、いはゆる銃後の男女の上に振りかへて、傷痍軍人はもとより、無事で帰還した兵隊に向ひ、いつまでも冷めぬ温い心で永くこれを慰勞し、感謝し、火野氏の抱くやうな折れ合ひに就いての杞憂を絶無たらしめたいと思ひ、且つそれが必ず実践されるべきであることを確信するのである。(117頁)

翌年には、安藤為造・山下農夫也・朝原吾郎「帰還兵の声」(興亜歴戦者有志会設立準備会、昭15)が刊行され、同書末の「帰還兵諸君!」では、三者連名で次の呼びかけが掲げられた。

帰還兵諸君!／お互にもつと卒先して陣中の将兵を慰問することに努めようではないか。／お互に遺族、留守家族、傷病兵を慰め鞭撻しようではないか。／お互に所見を寄せ経験を蒐め協力して事變の遂行に善処しようではないか。(32頁)

つまり、帰還兵の立場からは、上司が請けあつたようには銃後の現実には映じていなかったということになる。この点に関わつて、帰還作家の日比野士朗は「帰還兵士について」(『文芸春秋』(時局増刊30)昭15・3)で、『帰還兵問題』の内容として、『帰還兵は内地の現状をどう見るか、内地の人たちは帰還兵にどんな関心を持つか、帰還兵の生活や社会的地位をどのやうに善処すべきであるか』(56頁)という三点をあげていた。中でも日比野は、『帰

還兵問題の中心》を《帰還者の職業とか生活とか、要するに彼等の社会的な地位身分の善処といふ点》にみて、それを《何よりも為政者が即急に処理しなければならぬ問題の一つ》(61-62頁)だと位置づけて、その重要性を強調していた。

文学領域に関しては、『読売新聞』が内地の作家と帰還作家の往復書簡を「帰還作家への往診／復信」(昭15・1・11-28)として七組一四作家に書かせた。ラインナップは、武田麟太郎「恵まれた条件を 日比野士朗兄へ」、日比野士朗「叱られない仕事へ 武田麟太郎様」、丹羽文雄「苦難の路を越えよ 火野葦平へ」、火野葦平「新たな前進へ 丹羽文雄へ」、葉山嘉樹「百姓生活の中から 里村欣三兄へ」、里村欣三「自己弁解の弁 葉山嘉樹兄へ」、中岡宏夫「文学者としての生き方 竹森一男へ」、竹森一男「真の芸術の道に 中岡宏夫へ」、矢崎弾「何をめがけて進むか 山本和夫君へ」、山本和夫「新しく生きたい 矢崎弾兄へ」、高橋邦太郎「醜酔を待つてその上で 岩崎純孝君」、岩崎純孝「自己を喪じた僕 高橋邦太郎兄へ」、林房雄「信念ある文学 上田廣君へ」、上田廣「戦争ものを續けて 林房雄君へ」というものである。ここでは、中岡宏夫が「文学者としての生き方」(昭15・1・18)において、直接は竹森一男に示した、帰還作家(一般)への期待を引いておく。

帰還作家諸氏が、今度どのやうな文学的姿勢と行動をとるか、興味がないことはない。貴重な体験が、結局、単なる個人的経験として、素材としてのみ終るか、或ひは生死の境を切り抜けて来た強靱な魂が、この現実の動きを如何に把握し如何に構成し創造して行くか。僕らは確かに刮目してゐるの

である。(5面)

このように、帰還作家への期待とは戦場での《貴重な体験》が作家に作用し、何かしら新たな作品を生み出すことにあつた。

翌年には、小特集「帰還兵の感想」(『早稲田文学』昭16・3)が生まれ、無署名「編輯後記」では《聖戦五年を迎へ、益々国事多端の折柄、帰還兵の真摯率直なる感想の寄稿を得た》、《それぞれの興味深い一文は、必ずや読者に何ものかを暗示さすであらう》(168頁)と紹介された。牧野英一「帰還兵の声」では、《生死を共にした戦友同志だけに相通するものがある》という認識を基盤として、戦友から来た手紙の内容として、《お互ひの生活の改善とか、様々な人生観を持つ諸賢の意見とか、銃後に於ける戦友達の仕事に就いての良い信念等を話し合つて、お互ひの向上を計り度い》、《また戦線を知らない銃後の人々に対し、如何にして真の国家の非常時、或は今も尚、戦ひつ、ある兵士達の辛苦を思ひ抱かせるか》(30頁)といった相談が紹介されていた。また、吉田曉一郎は「帰還詩人の手紙」で、《内地の病院へ来て最初に悩んだのは銃後と前線の精神的関連性の真実》(32頁)だと、前線／銃後のギャップに由来する苦悩を訴えていた。さらに、同文には「美しき地図」の設定に重なる次の一節もみられる。

働かねば生活の一日さへ得られぬ私は応召以前と同様の会社の一職工に戻りましたが、夜毎にかみしめる苦い夢に背骨を削られるほどのげしさを体受します。(33頁)

ここには、労働者として働く帰還兵の苦悩が示されている。《帰還当時、私は帰還兵扱ひを受けることに耐へ難い嫌悪をおぼえた》という北島宗人は「帰還半歳」で、《物見高い人々の好奇心な眼に

迎へられる場合は勿論、《一応思慮深く見へる人々の思ひ過ぎたいたはり》にも《耐へられなかつた》(37～38頁)という。

また、棟田博は「銃後と帰還兵」(『或る帰還作家の想ひ』協榮出版社、昭17)において、「帰還兵といふ言葉」の含意を探っている。帰還当初には、「いつでも、「きつかつた事でせう、よくやつて下さいました。大変御苦労さまでした」といふ意味の感謝がこめられてゐることを発見した」(48頁)という棟田は、その後、《あれは帰還兵だといふ、そこになにか一つのハンデキヤップの感じられるそのやうな言葉》だと捉え直しては、それを《もはや返上したい》(52頁)と思ひ、次の決意表明へと至る。

われわれは「帰還兵」から急いで卒業しなければならぬ。「新銃後人」といふ表札を、私は私の額にベタリと貼りつけたいのである。新銃後人！ 新銃後人！ 新銃後人として、私は出発しなければならぬ。そして何処までも、何処までも、前進しなければならぬ。(53～54頁)

こうしてみると、帰還兵言説においては帰還兵自身による言表が説得力をもち、戦場／銃後のギャップや周囲の視線への戸惑い、それでも銃後で生きていく道の模索などが言説化されていた。

Ⅲ

帰還作家による作品への批評も、帰還兵言説の一角を成す。本節では、火野葦平作品の同時代受容を調査・分析していく。

火野の帰還第一作は「山芋日記」(『文芸』昭15・5)で、掲載誌の無署名「編輯後記」には次のように紹介された。

★火野葦平氏が三年にわたる戦場生活を終へ、帰還兵として故国の土を踏んだのは、昨年十一月のことであつた。／以来五ヶ月、国民的な読者を獲ち得た兵隊三部作の作者が如何なる作品を以つて新しい出発を試みるかは、我々の注視と期待の的であつた。／いま、作者はその期待に応える。百二十枚の力作「山芋日記」がそれである。講演と報告に寧日のない生活の余暇をぬすんで、作者は徐ろにこの作品の想を練つた。これは作者の新しい作品系列の発端をなすものであり、真の意味に於ける帰還第一作である。(272頁)

こうした方向づけも、以下に検討する同時代評に関わっていく。河上徹太郎は「文芸時評④変らぬ「帰還」」(『都新聞』昭15・4・29)において、同作を《五十を過ぎた朴訥な独り者の沖仕の手記といふ形で、片仮名に独特の送り仮名を用ひた、読み難い小説》だと紹介し、さらにその内容を次のように要約している。

一方に彼が世話になつてゐる沖仕で帰還兵の男と、他方に細工師で水商売の女に惹かれて細君とゴタゴタしてゐる友達を配し、その間で前者の影響で時局に慷慨したり、後者に忠告するために女との仲へ立つて、却て女に口説かれてどぎまぎしたり、結局友情に温められ乍ら、酒を飲んだり、盆栽を育てたり、山芋を掘つたりして暮してゐる男の話である。

その上で、河上は《「兵隊物」を書く以前の作者の旧作「山芋」や「糞尿譚」と同じ世界》だと判じ、《同じ山芋でも戦争前に見たのと違つてから見たのと違ふ筈であつて、その違つて見える所を作家の眼でも少し区別して貰ふべく期待してゐた訳なのだが、それは読者として得手勝手な望みであらうか?》(一面)と述べ

て、火野に帰還作家としての変化を見出し得ずにいた。まずは《力作》と評価し、《帰還後の火野氏が、偉大なる経歴をどのやうに活かしてゆくかは誰しも刮目してゐる》(150頁)という期待から「山芋日記」を読む稲垣達郎も「五月の小説」(『早稲田文学』昭15・6)において、「この調子は、『糞尿譚』『河豚』以来のもので、根本的には頗る古風な心懐だ」(151頁)と評して、河上同様、戦場へ行く前の火野作品との通底性を見出している。西村時衛も「文芸時評」(『文芸首都』昭15・6)で《帰還作家がどんな出発をするか、一時人々から興味を以て見られたやうであつた》、《私もいくらかそんな気で文芸の力作「山芋日記」を読んだ》と述べて、前二者同様に《「河童昇天」や出征前の諸作品を思合すと、火野氏は結局もとの境地に帰るではないか》と推測し、帰還作家らしさを見出せずにいた。ただし、西村は《「山芋日記」は描かれた人間像の底に素朴な滋味を湛へたよい作品》だと評価し、《帰還作家に彼等が戦場で夢みた主題を早く書くやうに急がす気ではない》、《徐ろに筆をとつてほしい》(107頁)と、拙速を避けての創作を促した上で、次の希望を開示していた。

私は、帰還作家が、彼等が戦場で、戦場ではとても書けないてい大きなテーマを夢みてゐなかつたとしたら、そして、彼等が戦争といふ偉大な現実におつつきり、その現実の生々しさ激しさだけで作品を書いてみたとしたら、皮肉でなくそれは何と淋しいことであるまいかと思ふ。(107-108頁)

つまりは、戦場体験という素材に頼らず、《作家の眼》でみたものを一定の時間をかけて血肉化した創作が、帰還作家には期待されていたのだ。したがって、短期的な成果を求めるならば、嗟

峨伝「創作月評」(『新潮』昭15・6)に示されたように、「山芋日記」は期待をもつて読んだが、それほどはなかつた》(76頁)ということにもなる。一方で、「山芋日記」を《今月の圧巻》と評す鶴三吉は「文芸」(『三田文学』昭15・6)において、《彼の帰還第一作であることは、この作品の有する幅と周到な写真(主人公及びその周辺とそれらの心理との)に於て成功してゐる》、《主人公大助の生活描写を通して現代の社会心理がさぶる妥当を得てゐる》(195頁)と論じて、同作が帰還作家によるものであるがゆえに獲得した要素を複数あげて評価した。

絶賛評としては、舟橋聖一が「文芸時評(2) 火野の力作」(『読売新聞』昭15・5・2)において、まずは《麦と兵隊》を読み通すには、途中で大分退屈した私も、今度の「山芋日記」には全篇を通して倦くところを知らなかつた》と面白さを強調する。その上で舟橋は、主人公・鈴木大助について《無学ではあるが、なかなか鋭敏な感覚の持主であると同時に、彼の愚劣で、平俗な生活の中にも、或る一すぢの輝やかしいヒューマンな道義の如きものが、書き流れてゐる》と指摘し、そこに《この小説のまことある美しさ》を見出し、《「山芋日記」は久しぶりに、作者のオリヂナルな行文の感覚をエンジンジョウイすることの出来る小説》、《今月の創作中の圧巻》(5面)だと顕揚した。また、「山芋日記」を《葦平の帰還後最初の、そして「糞尿譚」以来の戦記でない小説》と紹介するK・G「文芸」(『新潮』作品評)「文芸」昭15・6)では、《片仮名の、それも読み辛い仮名遣ひの文章》も含めて《正に葦平趣味つまりげても、趣味であり、変らぬ「山芋」「糞尿譚」の世界》だと捉えた上で、《市井人的ヒューマニズムと鄙

びた詩情を縋ひ合せつ、事変下に於ける地方の巷間の生活を悠々と展開してゐる」とその内容を要約し、《芥川賞授賞作家なみの中篇と受取れば、とにかく巧いし、面白い》(207頁)と評価している。ほかに、逸見廣「文芸時評」(『文学者』昭15・6)にも、《愛すべき素朴さが、この小説の主要な面白味であらう》(223頁)といった評価がみられた。

総じて、表現面ではカタカナ表記の多用に論及が集まった「山芋日記」だったが、そのことよりも、帰還第一作であること、「麦」と兵隊」以前の火野作品との通底性が注目を集めた。内容面では、従来からの火野の作品世界にヒューマニズムが加味されることで好評を得つつも、帰還作家作品固有の何かしらの表徴がみられなかった点は、期待外れとして否定的に捉えられた。

帰還第二作は「雨後」(『中央公論』昭15・7)である。掲載誌の無署名「編輯後記」(同前)において、《創作欄は戦争文学にそれ／＼の場を占め柄平たる地歩を固めた火野、上田、日比野の三氏を煩はして視野を前線から銃後へ、純文芸作品に研を競つて戴いた》(512頁)と紹介されたように、同時掲載は上田廣「指導物語 或る国鉄機関士の述懐」、日比野士朗「牧の身辺」で、《帰還作家号ともいふべき創作欄》(金谷完治「七月号の創作」戦争もの「その後」、『日本読書新聞』昭15・7・15、3面)となった。「雨後」は、《帰還後における家庭内の光景を克明に描いたもの》で、《老廃兵の父、その前妻との情事にまつはる母との争闘、母の賭博、それらのトラブルの中にあつて心を碎く若妻などが火野文学特有のねばりつこさで描かれてゐる》(式場隆三郎「文芸時評」【3】戦争文学者、『東京日日新聞』昭15・6・30、5面)。「雨

後」掲載誌では嵯峨伝「創作月評」(『新潮』昭15・8)において、《上田廣、日比野士朗、火野葦平と、三人の帰還作家だけを並べてゐるが、かういふやりかたも現代ジャーナリズムのもつ一つの対読者の感覚には違ひなからうが、これは読者依存の安易な精神にもとづく感覚で、決して高邁な自主的精神の現れとはなし得ない》と否定的にとりあげられ、「雨後」は《ひどく混濁してゐる》、《作者の頭のなかどこかで、この作品は澄んだ統一を欠いてゐたのではないのか》(125頁)と酷評された。他方、同誌の創作欄を《戦争作家三人衆》と称す鶴三吉は「中央公論」(『三田文学』昭15・8)で、《「雨後」が一頭高く抜き出てゐる》、《作者独特の調刺もピリつと光つて、傷痍軍人の心理経緯も充分納得が行く》(59頁)と高く評価した。「雨後」を《銃後小説としては随一の傑作》と評価するE・S「改造」(『中央公論』作品評)「文芸」昭15・8)では、次に引く意義が論じられた。

今まで銃後小説と言へば、大概生温いものだったが、これは近代作家精神による正銘の銃後小説である。戦場の勇士が、帰還後、家庭のいざこざに悩むことを主題にしてゐるが、さういふ主題の立て方さへ、まだ今日まであらはれず、その点でも先鞭をつけたものと言へる。彼の筆の粘り強さは十分発揮されてゐる。最近の大きな問題小説であらう。(155頁)

阿部知二も「文芸時評」(2)「帰還作家の自己発見」(『読売新聞』昭15・7・5)において、「雨後」を《我々に迫つて深く考へさせる一つの記録》と捉え、《真率な誠実なるこの「帰還兵」の生活記録は、かつて彼が戦塵のうちに書いた有名な作品にも劣らず重大》だと評し、帰還作家による銃後小説として「雨後」を高

く評価した。さらに阿部は、《一人の帰還兵が名士となつて味ふわびしさ》を《率直に書くといふこと》には《精神的な勇氣を必要とする》と作者を讃え、《帰還兵の自己発見、自己反省は、ただちに銃後一般の人々への警告となつてあるところに、今日の文学としてのはたらくは見事に果されてゐる》(5面)と、やはり「雨後」が互む問題性を高く評価していた。

「山芋日記」に比すと「雨後」は、旧來の火野作品との通底性や帰還兵作品としての物足りなさが論難されることはなく、銃後・現代社会をテーマとした示唆的な作品として受容された。

こうした帰還作家・火野葦平への評価は、市川爲雄「火野葦平論」(『早稲田文学』昭16・4)に集約されている。市川は、帰還後の火野作品について《戦場といふ素材に於ける「特殊性」から身を日常に転ずるといふ点で注目されるし、帰還後より日常的な作品を意図してゐる火野氏の態度は、妥当な方向を示してゐる》(30頁)と評価した上で、《日常と作家精神(文学理想)の如何やうな形が残されるかといふ点に於て、火野文学の全体は決定されるであらう》、《その意味で火野の前途にも多くの課題が残されてゐる》(31頁)と、銃後においてどのような作品を展開していくか、期待をこめて問うていた。その意味で、「美しき地図」は、帰還後の火野の前途を占う小説と位置づけられていた。

IV

火野葦平「美しき地図」(『朝日新聞』昭15・12・6、昭16・5・21(全165回)、挿絵向井潤吉)の連載開始に先立ち、次に引く

社告「次の朝刊連載小説『美しき地図』火野葦平作／向井潤吉画」(『朝日新聞』昭15・11・29)が掲出された。

火野葦平氏は現代随一の戦争文学作家として既に鬼才を謳はれ先きに聖戦記録文学として発表した「土・麦・花と兵隊」の三部作の完成に際し、本社は今年初頭「朝日文化賞」を贈呈してその功を讃へ勞作に酬いました。戦場に死を賭して貴き使命に従ふこと二年余、昨秋帰還した氏は、想を構へること一ケ年、今回本紙によつて銃後生活を描く最初の新聞小説として「美しき地図」を世に問ふことになりました。大陸の戦野で鍛へられた精神と情熱が凝つて此作品を生み出したもので、新体制下に漲る革新の意気を家庭生活や社会秩序のうちに見出し、鋭い洞察力を馳駆し、得意の軽妙な写実の筆に託して描破するものであります。近く好評裡に完結する丹羽文雄氏の「鬪魚」に引き続き朝刊紙上に連載し、時局下の健全なる国民小説たるの面目を示して読者の展望に添ふ事になりました。挿絵は幾度か従軍画家として戦線に活躍した二科会々員向井潤吉氏に依頼し紙上に精彩を添へることに致します。(7面)

ここでは、火野の経歴が手短に紹介され、帰還作家による《銃後生活》というモチーフまでが予示されている。なお、同記事には、次に引く火野葦平「作者の言葉」も掲載されている。

時局のざわめきの中で国民が自分の生活をひきしめ嘯みしめてゐる姿には一種の悲壮なものがある。しかし、私はこの時代をたのしい時代と思ふ。それは国民の心のひとつで、祖国をどのやうにも立派にすることが可能になつたからであ

る。政治といふものが遠くにあるものでなく、もはや全く国民自身の心の中にあるのだ。しかし私は無論政治小説を書くわけではない。ただ巷にひろげられた美しい地図を私の流儀で描いてみたい。明るく、たのしく、いひ得れば力づよい小説を書きたい。(7面)

このように、新聞社は帰還作家である火野葦平による《銃後生活》を前面に掲げ、火野本人は時局下における《国民》の生き方を《美しい地図》として書くことを目指し、連載ははじまった。

「美しい地図」の主題は、主人公・青地千太郎がその多くを担っている。日中戦争の帰還兵である千太郎は、現在、帰還兵が集まった青地鉄工所を経営している。太(15歳)、平(10歳)という二人の子供があるが、千太郎の出征中に妻・富佐は病死してしまふ。こうした設定は「美しい地図」に複数のプロットを駆動させる――帰還兵である千太郎が銃後をいかに生きていくか、再婚のゆくえ、工場の経営と仲間の更生等々、さらには千太郎の市会議員選挙出馬によってこれらの諸問題が深掘りされていく。

出征前の千太郎は、「出征前は、父の業である請負業を手伝ひながら、半分は日曜学校の子供の先生」であり、その熱心さは「奇人扱ひ」(「太鼓ついて(五)」昭15・12・10、5面)されるほどであった。そうした千太郎の理念は、次に引くように朝顔を育てることや宮澤賢治(「雨ニモマケズ」)への崇敬とも関わる。

千太郎が、毎年、朝顔を植ゑることは、もう、十数年間、欠かしたことがない。ただ戦地にある間だけはやむなく中止したが、帰還して来ると、早速、夏は朝顔を植ゑた。これは、ただ、朝顔を植ゑて、たのしみだけではない。子供ずきな彼

が、「雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ」澁刺とした健康な子供をつくるために、ひとつの運動として、継続してゐるのである。朝顔の美しさによつて、子供たちの身心を陶冶してゆかうといふのである。(「土について(九)」昭16・5・16、5面)

千太郎は、銃後の国民として生きる自己犠牲の精神の支えを宮澤賢治に求めていたが、これは同時代の賢治受容とも共振している。また、富士山や国旗を目にしては「愛する祖国」に対する気持ちは高まり、「人間の生きてゆく美しさ」が「胸に溢れる」(「錢について(二)」昭16・2・21、5面)という千太郎は、時局下における理想的な国民たらんとして、ナショナル・アイデンティティの形成・強化に積極的に寄与していく人物として造形されている。工場で新年挨拶をする千太郎に、次の発言がある。

我等は日本国民として、時局を認識し、新体制に即応し、正しき方向にむかつて邁進し、――そんなことは、なにも紙に書いて張らなくともよい。(略)国民はただ、国民としての責任を果してゆけばよいのです。(橋について(五))昭16・1・6、4面)

これは千太郎個人の考えであると同時に、青地鉄工所の基本理念でもあり、実際、工場で働く三橋史には次の千太郎評がある。

あたしが、いちばん(千太郎を)立派だと思ふのは、自分たちが兵隊だ、或ひは帰還兵だといふ意識を棄てるといつてることだわ。(略)工場には三四人、手足のない人がゐるけど、さういふ人たちが皆、青地さんのいふやうにして、自分の気持とたたかつてゐるわ。さうして、戦地で祖国を思つて戦つ

たと同じ気持で、工場で働かう。戦地で得て来た精神を、銃後の生活の中に活かしてゆかう。それは皆が自分の持場をほんたうに責任を持つて守ることだ。〔略〕——さういふのだわ。〔伝説ついで (三)〕 昭15・12・29、5面

日曜学校に関わり、隣組長を務め、工場長としても人望の厚い千太郎は、市議会議員に推される。隣組からの推薦にくわえ、「工場命令」によって千太郎は立候補を決意するが、工場構成員の総意による「工場命令」にはしたがわなければならぬ。その際、千太郎は「名誉欲などはすこしもなかつた」が、「青少年の教育といふこと」、「貧困の家庭の秀才を救ふことや、教育界の革新をすること」、「帰還兵や傷痍軍人のこと、慰問品、軍事郵便の発送、遺家族のさまざまな問題の解決」、「銃後の人達の一種の混乱といふもの」などの解決に利すると考え、「出馬する決心がついた」〔花について (二)〕 昭16・2・9、5面。結果的には、僅差で落選する千太郎だが、選挙運動を通じて千太郎の考えや千太郎評価が書かれていく。中でも注目すべき作中人物である小説家「火野葦平」の応援演説には、次の一節がある。

青地君の工場は、なにも帰還兵ばかり、或ひは傷痍軍人ばかりが集つて、へんに、銃後の人たちのなかに徒党をつくるといふのではなく、戦場からつづいてある兵隊としての気持を押へることができなかつた、つまり、兵隊が戦場でたたかふばかりでなく、もつと兵隊として完成されるために、そのやうな方法を選んだ、きはめて謙虚な動機から出発してゐるのであります。〔略〕私は工場の人たちを、みんなよく知つて居りますが、そんなに人格的に模範になる人ばかりが居ると

いふわけではありません。〔略〕しかも、それらの人たちが集つてゐる工場が、模範工場などといはれるのは、その工場が模範的であるといふのではなく、ひとびとの努力が美しくみえるのだと思はれます。〔旗について (九)〕 昭16・4・22、5面／〔図1〕参照

このように、「火野葦平」は工場とそこで働く人たちの「努力」が「美しくみえる」と述べて、積極的に評価していく。これは「美しき地図」の主題でもあり、タイトルの所以でもある。

千太郎自身は、帰還兵という立場から次のように演説した。

私たちは兵隊でした。兵隊として戦場にありました。〔略〕戦地では、兵隊の一挙手一投足が、すべて、祖国のためでした。〔略〕ところが、帰還してみますと、戦地では、すぐ身のまはりにあつた祖国が、なにか、すうと、遠のいてしまつたやうな、たまらないさびしさに捕はれたのです。〔略〕銃後のさまざまな状態のために、私たちは不甲斐なくも混乱をしてゐたのです。なんにも違つてゐるところは、ほんたうはないのです。しかし、さう気づくまでには、また、気づいた心を失はずに持ちこたへてゆくには、やはり、なみなみならぬ勇気が必要だつたのです。〔略〕国民が、一切の自分たちの生活を、高度な政治意識にまで結びつけるといふことは、祖国への信頼なくして、どうしてできません。〔略〕自分の一挙手一投足が、祖国の運命につながつてゐるといふ、確信こそ、国民の誰もが抱かぬばならぬものと思ひます〔旗について (十二)〕 昭16・4・25、5面／〔図2〕参照

こうして千太郎は、銃後に帰還した兵隊が改めて国民として、

「祖国」に貢献するための回路を実践的に提示してみせた。



〔図1〕『東京朝日新聞』S16/4/22



〔図2〕『東京朝日新聞』S16/4/25

また、「美しき地図」には下位主題とも称すべき、重要な挿話
が三つある。その第一は、工場で働く村田逸二の更生である。泥
酔して工場に帰った村田を千太郎が介抱していると、村田は「あ
んまり腹が立つたので、のんだのです」（馬について（十二）
昭16・1・24、5面）と、日頃の不満をこぼしはじめる。

こんなことはなにも今日に初はじめてまったことぢやない。日頃から、
むかむかしてゐたことなんだ。伯父貴がいつた。帰還兵は氣
が荒い。なにをいつてるんだ。氣が荒いのは帰還兵ぢやない。
兵隊ぢやない。銃後の人の方がよっぽど荒いぢやないか。あ
たし達が出征する前はこんなぢやなかつた。いつたいどうし
たんだ。（馬について（十五）昭16・1・27、4面）

こうした話を聞いた上で、千太郎は村田を次のように諭す。
僕らは兵隊だつた。それから、傷痍軍人だ。兵隊であつた上

に怪我をした。還らなくなつた戦友については言葉もない。
しかし、重傷を負ひながら、生きてかへつた僕らは、そのこ
とを非常なる幸福と思はねばならん。足を失ひ、手を失つた
ことは、なんとしても人間としての非常なる不幸だ。（略）し
かし、その不幸を、僕らは精神力ではねかへすことが必要な
んだ。傷痍軍人の再起奉公といふやうな、そんな言葉以上に、
真に人間としての更生が必要なんだ。（同前）

話すうちに千太郎も熱くなり、さらに次のようにつづける。

人間にとつて、もつとも大切なことは、生きることをほんた
うに信じ、生きること自信を持つことなんだ。（略）それ
のできるの、すこし誇張していへば、僕たち傷痍軍人だけ
ではないだらうか。僕たちは一度弾丸のために死んだも同じ
だ。足を失ひ、手を失ひ、あるひは盲目になり、いろいろと
身体に故障はできたが、そのときから、僕たちの生命は新し
いかがやきをもつて、僕らのほんたうの生命となることがで
きたのだ。（略）僕らは一度はなにもできないとあきらめか
けた。しかし、僕らは、やがて、そのいはれの無い悲しみを
克服したんだ。（馬について（十六）昭16・1・28、5面）
こうして「美しき地図」には、理念的な規範を提示した陸軍の
パンフレット類とは異なり、帰還兵の立場・感情に即した苦悩と
そこからの気持ちの立て直し方がいねいに書かれていた。

「美しき地図」下位主題の第二は、工場で働く三橋史の結婚で
ある。婚約相手の牛島春雄とその母から青地鉄工所を退くこと
を求められていた史は、逆に牛島に対して千太郎に会うことを求め
つつ、その人物や工場の趣旨を熱心に説いていく。史の旋盤指導

にあたっていたのは雁田堅士という傷痍軍人で、戦場では千太郎の部下であり、史の兄・三橋篤とも戦地で交流があった。仕事を通じて好意をよせあう姿は、二人を「工場命令」で結婚させようとする機運を高めるほどで、史も牛島と雁田を比較しはじめた。ある時、史は工場で左手を怪我し、「——あたしは、自分が怪我をしてみても、こゝにある人たちの立派なことが、いつそう、よくわかつたわ。」（「機械ついで」(五)「昭16・3・13、5面」と述べ、そのことで傷痍軍人・雁田への理解を深め、ついには雁田との結婚を命じる「工場命令」を受諾する。牛島という相手がいた以上、史は悩んだが、それは次のように解決されていく。

史は唇を噛んだ。しかし、彼女のそのやうな苦悶の心のうへを、あたいたかい衣のやうにふんはりとつつんで来るものを、最後に史はしつかり掴んだのである。それは、工場の人たちへのかぎりない信頼である。（「命令について」(十四)「昭16・4・12、5面」）

こうして、個人の領分に属するはずの結婚について、史は工場（集団）の考えを自分の決断として、雁田との結婚を決める。

第三の低位主題もまた、工場と結婚に関わる。「美しき地図」冒頭から登場する主要人物に、千太郎が日曜学校で面倒をみた中久保斌あきの姉・由紀子がいる。弟の学資のために墮落していた由紀子は千太郎の工場で働くことを希望し、千太郎は斌に頼まれたこともあり、当初は不承不承ながら事務員として採用する。しかし、ともに働くうちに千太郎は由紀子への警戒を解き、次第に惹かれ、宮澤賢治「雨ニモマケズ」を書き写すうちに由紀子の名前を書きつけるほどになっていく。「美しき地図」終盤では、千太郎の弟・

百太郎が由紀子との結婚を望み、由紀子も一度はそれを受諾する。この間、百太郎は由紀子の身辺調査を行い、「感心できない世界のなかで、すこしも穢されず、胸をはつて、美しく生きて来たひと」（「土について」(七)「昭16・5・14、5面」）であることを確認する。その後、百太郎は兄と由紀子の相思相愛に気づき、求婚をとりさげ、「工場命令」によって千太郎と由紀子を結婚へと導く。この結婚は、千太郎にとっては帰還兵の再婚であり、由紀子にとつては墮落した人生からの再生であった。

ほかにも多彩な人事・挿話が盛りこまれた「美しき地図」だが、中心的な主題とそれに連なる低位主題は、いずれも新体制運動が展開される銃後で、個々人が「己れにかへつて、己れの責任を国民としての責任にすること」（「橋について」(六)「昭16・1・7、5面」）を登場人物たちの生き方を通じて提示していた。その際、生き方の規範や意志決定においては個人より集団が重視されていた。もとより、「雨ニモマケズ」を参照しつつ自己犠牲の精神を体現した千太郎の生き方は、その代表・象徴にほかならない。

V

最後に、火野葦平「美しき地図」（初出／単行本）の同時代受容について、管見の限りの同時代評などから検討しておく。

連載中の「美しき地図」については、岡澤秀虎「文芸時評——二月の小説——」（『早稲田文学』昭16・3）に論及がある。直接は埴政盈「アルカリ地帯」（『中央公論』昭16・2）に論及する同文で岡澤は、「かういふ英雄的な（この言葉は決して誇張ではな

い) 実践の中にある人で、仕事の余暇には生活を芸術化し得る人が、我日本にも再び(明治維新の志士達と同様に)地に足をしっかりとつけて生れてゐるかと思ふと、実に心強い(65頁)と評し、『大政翼賛運動』の生れてきた今日に於ては、この作の作者のやうな文芸家が日本にも沢山出て来るだらう」という見通しを示し、『最近「美しき地図」を書きつつある火野葦平氏の如きもその方向に進みつつある』(66頁)と火野を参照していた。また、作家・作品評ではないが、『今次の聖戦に大陸の戦野を馳駆し不幸敵弾に傷つて帰還、除隊となつた隻脚勇士ばかり十四名が集つて一工場を作り、物資節約、廃品回収の国策に協力しながら更生の途を拓かうといふ「美しき地図」実話』(2面)を紹介する記事「高らかな銃後の歩式 隻脚支へ合つて／実話「美しき地図」(『朝日新聞』昭16・2・19夕)も掲出された。

その後、単行本『美しき地図』(改造社、昭16)が刊行され、無署名「出版だより」(『文芸』昭16・9)においては、『御期待に応へる出来栄で御満足を獲得てゐること、思ふ』、『新秋の読書界に渦紋を投げかけることであらう』(175頁)と告知された。改造社の「広告 美しき地図／火野葦平著」(『朝日新聞』昭16・8・15)では、次のような内容紹介・宣伝が展開された。

こゝに描かれた世界は何といふ明るく清く楽しい理想郷であらうか——本篇の主人公青地千太郎は、忠勇無双の詩人軍曹葦平、渡世人の義理も仁義も承知の親分葦平、甘い亭主で優しい親父葦平、ををしくめめしい人情男葦平、その人なのである。名譽の戦傷を負うて帰還した千太郎は戦場で立派な兵隊であつた如く、銃後でも立派な生活者であつた。不撓不屈

の戦場魂で傷兵だけの理想的工場を建設し、明るく健康に生きる人人を描くこの小説は、恋あり笑ひあり涙あり諷刺ありで、一億国民待望の国民文学の巨弾である。(2面)

単行本刊行後には、伊藤整が「長篇小説評(中) 観念的な人間観」(『朝日新聞』昭16・9・29)で「美しき地図」をとりあげた。『火野葦平氏の「美しき地図」と荒木魏氏の「地に芽ぐむ」は、半島の作家達の後で読むと、驚くほど観念的』だと捉える伊藤は、『作家たちが特に現在感じてゐる、人間性を美しくとらへたいといふ念願は、大変広汎な現象であるし、悲しい願ひの心に貫かれてゐる』ことを認めつつも、『主人公が甲の環境に置かれた時と、乙の環境に置かれたときと、同一の軸に立つて廻転できない』(3面)といった技術的瑕疵について批判していた。

他方、「美しき地図」の主題が帰還作家・帰還兵に正しく届いた証左もある。棟田博は「仕事に就いて」(『或る帰還作家の想ひ』前掲)において、本稿でも引用した「旗について(十二)」における千太郎の講演について、『この一章を読んだとき、僕は、火野君が、こつそり、僕たちの胸の中を覗いてゐるのを知ると同時に、これはまた火野君自身の思ひでもあり、そして、すべての帰還兵の抱いてゐる考へでもあることに想ひ至り、肅然とした』(252頁)と、帰還兵の立場から共感を示した。その感動を、『一人の千太郎のこの言葉は、帰還兵全部の「或る反省」である』、『と共に、その反省の上に立つて、これから新しく起さうとする前進の前の心構へでもある』(253頁)と換言する棟田は、銃後の生活における帰還兵の違和感を次のように綴つていた。

帰還兵は、そこで、戦争の向ふ側にあつたものを、足もとの

生活の中に探し求めやうとする。烈しい戦争の現実につかま
りながら、彼方にくつきりと見出してゐた、そのやうな美と
道義とが、始めて容易にあるものでないことを知る。(254頁)
こうした現実に直面した帰還兵が抱く違和感とそこからの再生
は、「美しき地図」が体現した主題と相似形を描く——《戦争の
現実につかまりつゝ、遠く眺めた美と道義とは、探し求めるので
はなく、われ／＼が生み出さなければならぬものであつたこと
が判然として来たのである》(255頁)。こうした帰還兵作家の創作・
発信／帰還兵作家の読書・受容において、火野葦平「美しき地図」
は理想的な意味作用を同時代に実現したことになる。

前後して企画・刊行された『帰還作家・純文学叢書』(六芸社、
昭16～17)に論及する「帰還兵と文学」(『三田文学』昭16・6)
の山本和夫は、『帰還兵の書いた作品には、「美しき地図」の中の
千太郎がいふ「帰還兵のもつ、除き去ることのできない、ひとつ
のさびしき、或ひはかなしさ」が流れてゐる筈』であり、『これ
は文学以前のものであると同時に、文学するものにとつては、ま
た、文学そのもの』(128頁)だと断じていた。その上で山本は、『郷
愁を歌ふことは、戦争文学の常道であるとは思はないが、しかし、
帰還兵の郷愁は、一般から、もつと理解されていいと思ふ』(130
頁)と述べて、帰還兵への理解を求めていた。

こうして「美しき地図」は、帰還兵言説において参照される規
範と化しつつ、帰還兵と銃後を媒介する役割を果たしていく。

注

- (1) 火野葦平「麦と兵隊」(『改造』昭13・8)、「土と兵隊」(『文
芸春秋』昭13・11)、「花と兵隊」(『東京／大阪朝日新聞』昭
13・12／昭14・6)。あわせて、拙論「『戦場にいる文学者』
からのメッセージ——火野葦平「麦と兵隊」」(『昭和一〇年
代の文学場を考える 新人・大宰治・戦争文学』立教大学出版
会、平27)、「火野葦平「土と兵隊」の同時代的意義——文学
(者)の位置」(『戦場における人間(性)』——火野葦平「花
と兵隊」序論」(『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦
場』神奈川大学出版会、平30)参照。

- (2) 池田浩士「戦地の表情、銃後のこころ」(『火野葦平論』『海外
進出文学』論・第一部』インパクト出版会、平12)、129頁、131
頁、132頁。

- (3) 神子島健「『帰還兵』の時代——戦場から銃後へ」(『戦場へ征
く、戦場から還る 火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士
たち』新曜社、平24)、271頁。

- (4) 注(3)に同じ、289～290頁。

- (5) 注(3)に同じ、341頁。

- (6) 注(3)に同じ、389頁。

- (7) 福田淳子「火野葦平と向井潤吉——従軍がもたらしたもの」
『学苑』令2・9)参照。

- (8) 構大樹「『雨ニモマケズ』という生き方——戦時下における評
価の高まり」(『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』
大修館書店、平31)参照。

※本研究はJSPS科研費「P20K00346」の助成を受けたものです。

(まじもと) 神奈川大学国際日本学部教授